

平成 21 年 5 月 27 日現在

研究種目： 基盤研究 (C)
 研究期間： 2006 ~ 2008
 課題番号： 18520141
 研究課題名 (和文) 近世俳諧資料の収集と整理
 研究課題名 (英文) Collection and arrangement of seventeen-syllable poetry during the early modern age in Japan
 研究代表者
 富田 和子 (TOMIDA KAZUKO)
 相山女学園大学・現代マネジメント学部・助手
 研究者番号： 20155568

研究成果の概要：

従来、俳諧の停滞期と言われる近世後期以降の遊戯的な雑俳を含む資料紹介・翻刻は少ない。そこで、収集した資料群の中から、点者の選句の好みを知る参考書の役割と作者同士の交流を意図した名簿の役割を担い、1884年に出版された珍しい句集『狂俳道しるべ』初編など、3点を紹介した。次に、文明開化期の東海地方の狂俳壇と東京の冠句壇の関わり、当時の詩人や歌人、俳諧師、川柳点者、都々逸連、冠句仲間に対する意識、教導職制度の影響などを把握した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	500,000	0	500,000
2007年度	500,000	150,000	650,000
2008年度	300,000	90,000	390,000
年度			
年度			
総計	1,300,000	240,000	1,540,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：(1)俳諧・雑俳 (2)近世文学 (3)名古屋俳壇の周辺

1. 研究開始当初の背景

尾張・三河・美濃は俳諧の盛んな地域である。そして、俳諧は魅力的であり、近世期以降、幅広い層の人々が活躍した。そのため、特に蕉風俳諧についての研究は多く、成果が上がっている。しかし、蕉風俳諧に代表される芸術的な方向と、前句付俳諧に代表される遊戯的な方向があることを、俳

諧の実態として重層的にとらえ考察すべきことを指摘されながらも、遊戯的な雑俳を含む研究は少ない。現在の俳諧研究は芭蕉及びその門人に片寄る傾向があり、地方の俳人・俳壇に関する研究は手薄である。そして、それらに関する資料の多くは個人蔵である。例えば、俳句の短冊や俳人の書簡など、研究史上貴重なものも、狂俳関係の

ものなどは、子孫がその趣味を持たない場合、捨てられたり、古書市で処分されたりして散逸するが多い。それを防ぐためにも、急いで調査をする必要がある。

さらに現代は、社会の変動にともなって、創作・享受の場が崩壊しつつある。雑俳そのものがもっている性格、環境の変化、ともに困難な問題があり、その研究が急がれる。

2. 研究の目的

従来俳諧の停滞期と言われる近世後期に着目する。そして、それ以降、現在までの東海地方の俳諧資料を収集し整理して、その特徴を明らかにすることを目的とする。特に、尾張・三河・美濃の資料を扱う。そして、

(1) 俳諧史の研究において、手薄であった遊戯的な雑俳を含む俳諧資料の収集と整理を行う。

(2) 俳諧や狂歌は、読み捨てられることが多かった。そして、共に、真酔や水魚洞をはじめとして共通する作者や享受者がいた。その点に着目し、俳諧と狂歌など他の流行した短詩系文芸をどのように愛好し関わりを持ってきたか。それぞれの影響関係はどうであったかについても窺える資料の収集を行う。

以上の点に、留意して、埋もれた資料を発掘し、貴重な俳諧資料の散逸を防ぎ、価値を正しく評価して、今後の俳諧史研究に寄与することが大きな目的である。

3. 研究の方法

以下の手順によった。

(1) 東海地方に散見する近世後期の俳諧・狂歌資料の収集を始める。

① 個人所蔵の資料の撮影・複写を行う。

② 点者・愛好者からの聞き取り調査。

③ 尾張狂歌の影響関係を視野に入れて、俳

諧関係者の狂歌資料を収集する。

④ 地方の図書館・博物館所蔵の埋もれた俳書や引札類の収集と整理を行う。

特に、①②は、ご高齢者ばかりなので急いで行う必要があった。

(2) 収集した資料を整理する。

(3) 貴重な資料を紹介し、考察する。

(4) 収集・整理した資料群から、俳諧・俳壇の実態をとらえ、考察する。

4. 研究成果

以下の結果を公表した。

(1) 遊戯的な雑俳を含む資料紹介・翻刻が少ないので、次の3点を翻刻して紹介した。他に、(2)にあげる論文の末尾に、『雅風教会規約』と「作例一斑」の翻刻を付して紹介した。

① 翻刻『狂俳道しるべ』初編とその紹介(一) (「社会とマネジメント」5巻2号 2008年3月)、同(二) (「社会とマネジメント」6巻1号 2008年9月)

本書は、狂俳書には珍しく、俳号に本名又は通称と簡単な所在地(中には職業も)を記して「雅用風交録」の役目を担い、明治17(1884)年に、現在の愛知県岡崎市で出版された選句集である。点者の選句の好みを知る参考書の役割をも担い、継続発行を意図した。構成は、所在地域を大きく7区分し、東海地方の他、東京の部もある。当時、東京にも狂俳結社があり、交流があったことが窺える。このような狂俳書は、とても珍しい。

また、所在地をみると、古くから連歌や芸能の盛んな地域が多くみられる。俳諧史・雑俳史だけでなく、芸能史を考える上でも興味深い資料である。

② 翻刻『笑言志津保具双帔』全とその紹介(一) (「社会とマネジメント」4巻2号 2007年3月)、同(二) (「社会とマネジメント」5

巻1号 2007年9月)

本書は、享和元年頃から文政13(天保元)年頃までの石橋庵真酔の狂文・序跋などを収載した写本で、好事家で有名な小寺玉晁(尾張藩士)旧蔵書である。真酔は『尾張狂俳の研究』(勉誠出版 2008年)で述べたとおり、化政期から天保期の名古屋文壇の重鎮として活躍した。狂俳点者もしたので、この中には雑俳に分類される狂俳集や地口巻の序も含まれる。月丸序は、神道やインド・中国の書籍を学んだ真酔による、今の時代に必要な真におもしろい戯文集であると称える。

当時の尾張の町人、彫工を家業とした階層の教養の高さと、洒落気が窺われておもしろい。

③翻刻紹介「文車追善 露地図」(「楳山国文学」31号 楳山国文学会 2007年3月)

近年には、従来ほとんど研究対象とされなかった俳諧一枚刷の魅力と意義を問い直す機運がある。「文車追善 露地図」という懐紙二枚つづき一枚刷は、所載する俳号から、天保8年頃から11年の間に興行されたものと推定できた。そして、尾張狂俳中興の祖と称された芝石も句を寄せる。

更に地方都市である伊勢から、江戸・遠江・近江・京・大坂・須磨・常陸・阿波・豊前・伊予他の全国的な俳人たちをつなぐネットワークが機能したことが窺えた。

本作品を簡単に紹介すれば、懐紙の上半分には、連句と発句がリズムカルな波形に配される。その下半分、一枚目の絵は、寄付きから出て、四つ目垣の間の入り口から入ったところ。踏み石の上を、墨染めの衣を着た僧にいざなわれて、袴をつけ正装した二人の男たちが続いている。大小各一腰の刀をさしているのは武士、脇差のみをさ

しているのは町人であろう。「お足元にお気をつけ下さい」「ありがとうございます。よいお天気ですね」とでも挨拶を交わしているのだろうか。二枚目には、一枚目から続く、長くゆったりとうねった露地の踏み石が画かれる。その右端脇の赤い万年青の実がかわいらしい。この絵に追善の意をこめたのであろう。

俳文芸の新しい領域を語るにふさわしい作品である。

(2)収集した資料群の中から、特に次の3点を論じた。

①名古屋『雅風教会規約』にみる教導職制度の影響(「楳山国文学」33 2009年3月)

教導職制度廃止後の名古屋で「三條御教憲」を掲げる清原社の『雅風教会規約』(明治20年)が残る。ここから、明治維新直後の民心収攬のためにできた全国的組織である教導職の制度が、教部省の廃止後も地方に根付き、名古屋の冠句(狂俳)の結社である清原社設立に大きく影響を与えたことを論じた。

更に、結社の運営に関することや、判者・撰者・評者の呼称の違いは階級の区分であることなどを論じた。

末尾に『雅風教会規約』を翻刻紹介した。

②東京 桑弧社のめざした「清警冠句」(「社会とマネジメント」6-2 2009年3月)

明治20年頃、東京で発足した桑弧社は、「清警冠句」の全国普及をめざして、機関誌「桑弧集」2編に「作例一斑」を掲載する。これは後進のための冠句作法書の一部であり、随所に桑弧社のめざす冠句の形を述べる。

当時、遠来舎友得著、篠田久次郎編『初心必読狂句虎の巻』(滑稽堂 明16)、撫松庵兔裘『俳諧麓洒栞』(同楽堂 明25)、其角堂機一『発句作法指南』(穎才新誌社 同年)、

佐佐木信綱『歌のしをり』（博文館 同年）、正岡子規の有名な俳論書「俳諧大要」（明 28）など、多くの作法書、俳論・歌論書がまとめられていく。その中で、若葉家志計留による「清警冠句」の作法書がどのような形で刊行されたかははっきりしないが、冠句にも新しい時代にふさわしい作法書が求められていたのである。

その新しい時代にふさわしい「清警冠句」とは、付句十二字で各自の感動を言い尽くし、題のもつイメージ・先入観にとらわれず、地域や時代をこえて共感されるものであることを論じた。

末尾に「作例一斑」を翻刻紹介した。

③明治期の俳文芸意識の魁—東京「清警冠句」と狂俳—（「東海近世」18 2009年2月採択・同年5月発行予定）

明治20年頃、東京で発足した桑弧社の「清警冠句」は、文明開化の風潮を強く意識し、正岡子規が「俳諧大要」で述べる以前から、観念的風雅と密着した、いわゆる月並風を否定し、新しい時代にふさわしい冠句を目指したことと、東海地方の狂俳壇との関わりを論じた。

また、機関誌「桑弧集」初編の跋文に、当時の詩人や歌人、俳諧師、川柳点者、都々逸連、冠句仲間に対する意識が窺え、興味深いものであることなどを論じた。

この「桑弧集」の売捌所に、東京日本橋の大倉孫兵衛と名古屋の片野東四郎がおり、当初から広域販売を目論んでいたことが窺えた。

なお、桑弧社と東海地方の狂俳壇がどのような経緯で関わりをもったのか、桑弧社に演劇関係者が多いのはなぜなのか、若葉家志計留はどのような人物であったのかなど、はっきりしないので調査を続けたいと考えている。

更に、埋もれた資料を発掘し、貴重な俳諧資料の散逸を防ぎ、価値を正しく評価して、今後の俳諧史研究に寄与することに努めたいと考えている。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

(1) 富田 和子、「名古屋『雅風教会規約』にみる教導職制度の影響」、椋山国文学（椋山女学園大学国文学会）、査読無、33号、2009年、P27～P46

(2) 富田 和子、「東京 桑弧社のめざした「清警冠句」、社会とマネジメント（椋山女学園大学現代マネジメント学部）、査読無、6巻2号、2009年、P88（一頁）～P80（九頁）

〔発行予定雑誌論文〕（計 1 件）

(1) 富田 和子、「明治期の俳文芸意識の魁—東京「清警冠句」と狂俳—」、東海近世（東海近世文学会）、査読有、18号、2009年2月採択・同年5月発行予定

〔学会発表〕（計 1 件）

(1) 富田 和子、「明治文明開化期における雑俳界と教導職制度」、大阪俳文学研究会、2009年2月15日、伊丹市柿衛文庫

〔その他〕

雑誌掲載 資料紹介（計 5 件）

(1) 富田 和子、「翻刻『狂俳道しるべ』初編とその紹介（二）」、「社会とマネジメント」（椋山女学園大学現代マネジメント学部）、査読無、6巻1号、2009年、P110（一頁）～P93（一八頁）

(2) 富田 和子、「翻刻『狂俳道しるべ』初編とその紹介（一）」、「社会とマネジメント」（椋山女学園大学現代マネジメント学部）、

- 査読無、5巻2号、2008年、P128（一頁）
～P115（一四頁）
- (3) 富田 和子、「翻刻『美言志津保具双昏』全とその紹介（一）」、「社会とマネジメント」（梶山女学園大学現代マネジメント学部）、査読無、4巻2号、2007年、P180（一頁）～P165（十六頁）
- (4) 富田 和子、「翻刻『美言志津保具双昏』全とその紹介（二）」、「社会とマネジメント」（梶山女学園大学現代マネジメント学部）、査読無、5巻1号、2007年、P84（一頁）～P71（十四頁）
- (5) 富田 和子、「翻刻紹介「文車追善 露地図」」、「梶山国文学」（梶山女学園大学国文学会）、査読無、31号、2007年、P59～P76

6. 研究組織

(1) 研究代表者

富田 和子 (TOMIDA KAZUKO)
梶山女学園大学・現代マネジメント学部・
助手
研究者番号：20155568

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし